

# 『あの日 僕は』 絵本作家の仲間入り？

岩見沢市医師会  
北海道中央労災病院

## 飯塚 幹也

2011年3月11日、美唄脊損センターで診察中でした。揺れを感じ、震源地は道内のどこだろう？と思いながら、患者さんには「揺れましたね」と話し、診察を終えました。その後、階段で病棟に向かいました。病棟のテレビから刻々と被害状況が飛び込んできます。震源地は東北であり、規模はマグニチュード9。我々が今まで経験したことのないような地震、津波、火災、原発事故など甚大な被害を日本列島に与えた災害でした。テレビを観ていて、何もできないことは分かっているのですが、心のなかに得体の知れない不安が生まれ、落ち着くことができず「脊損センターの空き病床に被災者を収容できませんか？」など非現実的なことを当時の院長・安田慶秀先生にご提案などしていました。「何かしなくては、何かしなくては！」と病院全体が騒ついており、上空を飛ぶ支援機から見えるよう、また、被災地に応援が届くことを願い、5月には病院職員有志によりセンター屋上に巨大な応援メッセージボードを設置したり、募金を集めたりしました。

震災から半年後の9月、集めた募金を携えて、機動力を考えてバイクの鉄馬TDM900を相棒に選び、「がんばろう日本」のステッカーを貼り、自力対応ができるように荷物をまとめて出発しました。苫小牧からフェリーで八戸へ上陸。最も被害の大きかった南三陸町の志津川病院に進路を取り南下を開始。9月の台風と重なり雨の中の走行でした。目に映るものは、まさに人生観が変わるほどの大きな衝撃を受けるものばかりであり、非日常が眼前に広がっていました。巨大な船や小舟が打ち上げられ道路を遮断し、信号が消えゴーストタウンのような商店街。どの道も地盤沈下で悪路となり、瓦礫と動かなくなった車の山が道の両側に壁を作り続けました。走行中には人の気配も感じず、無音の雨の中を走り続けました。ヘルメットの外から、生き残った一本松、SOSを屋上に掲げていた病院、大火災のために黒い塊になった車、橋に挟まって動けなくなった船、最後まで津波警報と避難放送をして骨組みだけになった庁舎などが入り込んできます。今立っているこの場所で多くの人が亡くなったと思うと胸が締め付けられました。

鉄馬にまたがり志津川病院の前に到着、病院前の簡易スタンドで給油してもらいながら当時の状況をスタッフが話してくれました。「病院前に山積みになってる瓦礫、この瓦礫は全部病院の中にあっただも

のです」「4階まで完全に水没しました」。しばらく病院の姿を見て自分が沈黙していると「地盤沈下が激しいので道が冠水しますよ。バイクだと厳しいので早く抜けた方がいいですよ」と言われ、その場を離れました。当時、志津川病院は登米市米山町に仮施設として設置されておりました。最終目的地に向かいます。仮施設のスタッフの方に当院からの募金、メッセージなどを渡しミッションを終え、しばらく雲の流れを追っていましたが、「行くかと！」と相棒に声をかけて北上を開始しました。帰路は台風を追われる形であり、太平洋側のフェリーが軒並み欠航となり、北上を続け青森からフェリーで函館に上陸し帰還しました。しかし函館からの走行の記憶がなくて、どうやって戻ったのか？ 今流行りの自動運転でしょうか？

2019年夏、YAMAHAから『はしれ絵本！』というプロジェクト企画のお知らせがあり、自分のバイクに関する物語を選考し40名の物語を40冊の絵本とし、東京で展示会を開催するというものでした。酔った勢いで申し込み、採用の知らせを受け、ネットでインタビューしていただき、絵本となりました。絵本は切り絵で綺麗に作っていただき、当時のことが鮮明に再現されていました。絵本の内容は、皆様からお預かりした気持ちを相棒であるバイクに乗り、荒れた震災後の道を進み、目的の場所に贈り物と届け、その後、これからの人生を乗り越えていこうと相棒のバイクと会話をしている内容です。昨今の日本列島、まさに台風、地震など災害が毎年のように起きています。2011年から職場の名札にはあの時の気持ちを忘れ無いうように『がんばろう日本』の缶バッジをつけております。些細なことで感情が動かされないように心がけています。がんばろう日本！ 見せよう日本の力！

